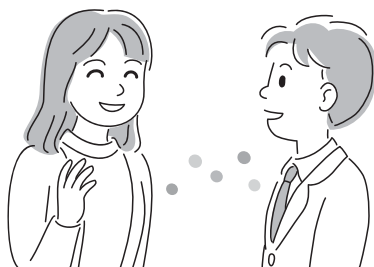


高校生

との対話

今年度、「高校生との対話」のリレー連載を担当することになりました、佐藤と申します。これまでこのリレー連載で、発達段階や苦戦の背景を考えた丁寧なかわり・支援を読み、たくさんの学びを得て、参考にしてまいりました。それを今度は自分が、と思うとプレッシャーで足が震えますが、これまでかかわった保護者の方が「自分たちの事例を他の方のために役立ててください」と言ってくれたことを思い出し、担当をお受けすることとしました。よろしく願いします。

わかれうとする姿勢がエンパワメントする



岩手県立高等学校教諭

佐藤 久美子

さとう くみこ 担任が抱え込まないような校内支援システムを構築し、生徒の意思を尊重する支援やチームで支援することを心がけています。

日本は、二〇二一年に発表された「SDGs 報告書」で一六五か国中一八位となりました。進捗状況において深刻な課題があるとされているものの一つが「ジェンダー平等」です。

平成二十七年に文部科学省は「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな

対応の実施等について」という通知を出していますし、最近では、ジェンダーレス制服の導入の話も多く聞かれるようになってきています。

今回お伝えするのは、LGBTQという言葉がメディア等で取り上げられるようになった頃の事例です。

「私だって異性を好きになったことがある」

日本舞踊を習っているAは豊かな長い髪で色白で、よく「日本人形みたいだね」と言われていました。理系科目が得意で、「先生、シンギュラリティ（技術的特異点）って到来すると思いますか？」と語りかけてくる、非常に議論好きな生徒でした。

私が修学旅行の引率をした際、点呼のためAたちの部屋を訪れると、同室の生徒はおらず、Aだけが部屋にいました。どうやら同室の生徒は、彼氏と電話をするため不在だったようでした。そのことを私がうらやましがると、Aは「私だって男の人を好きになったことあるんです」。

よ」と、何の脈絡もなくボソッとつぶやいたのです。私はその言葉を聞いて特にAに何か聞くこともありませんでしたが、Aがつぶやいた言葉が妙に頭の中に残っていました。

それから三か月くらい経ち、私は異動することになりました。その直前に、Aから「相談がある」と呼び出され、「自分の性別に違和感がある。私は女性ではないし男性でもない」と、Xジェンダーであることを打ち明けられました。修学旅行のあの夜の言葉と一気につながり、私は深く納得していました。そしてAは自分がLGBTQの当事者であることを周囲に公表し、苦しさを理解してほしいと考えていると語りました。

「思春期特有のものかもしれない」

私はまずAに打ち明けてくれたことへの感謝を述べるとともに、性別がどうであろうと私はAが好きだということを伝えました。そして、周囲に公表して理解を得るには時間がかかるかもしれないこ

とや、心理的に傷つく可能性があるため、まずは保護者や担任をはじめとする教師、理解してくれそうな友達に話すことから始めるようアドバイスしました。また、思春期は自分探しの時期にあるため、自身の性自認が揺らぐことがあることから、今の状態は一過性である可能性も考えられると話しました。Aは私の説明をうなずきながら聞いていましたが、どこか不服そうな顔をしていました。

その後、私は異動したため、ときどきSNSでAとやりとりをしました。

わかってほしくて親に話したが、理解してもらえず、自分がLGBTQであることを他の人には話さないようにと言われたことがショックだったということや、ある先生からは理解できないと突き放され、同級生からは心無い言葉を投げつけられて傷ついたというエピソードが送られてきました。また、スカートを履くことが苦痛になり、ジャージで過ごすことを学校から許可されたということも聞きました。

希死念慮が強くなってきたため、スク

ールカウンセラーから精神科を受診するようすすめられ、受診したところ、医師からは「思春期ということを考えてと勘違いである可能性もあるので、あまり深刻に考えすぎないように」と言われたと、少し残念そうに語っていたのが印象的でした。

保健室で過ごすことも多かったようですが、自身の努力と周囲の協力もあり、無事高校を卒業し、希望の大学進学を決めることができたという報告を受けました。

LGBTQの当事者として活動を始めたA

大学入学後も、Aは周囲の何気ない言葉や対応に傷つきながらも、やりたい研究をひたすらに続けました。そのうち、LGBTQの支援団体の方とつながるようになり、当事者として講演を頼まれるようにもなり、現在も活動を続けています。

Aは、「体は女性だが、私自身は女性でも男性でもない。私は私だ」と話します。

また、今だから言えるが、「今の状態は自身の勘違いかもしれない」とか「他の人には言わないように」と言われたことは実はショックだったと話していました。自分の真剣さを正面から受け止め、突き放さず理解を示し、寄り添ってほしかったとも語っていました。

私も含めて周囲の人たちは「本人があまり深刻に考えすぎて落ち込みすぎないように」と考えてかけた言葉だったと思うのですが、結果的にはAを傷つけていたのだからと反省しました。本人の気持ちを聞いてはいても、理解はできていなかったのだと思います。

LGBTQの当事者が抱える問題に対する高校生の意識は高く、総合的な探究の時間の中でLGBTQについて探究している生徒も多いです。その生徒たちのために、Aに当事者としての話をしてもらう機会を設定しました。A自身、教育に興味があり、学校現場がどのような配慮をしているのか知りたいということ、高校生にぜひ自分の体験を話したいという思いがあって実現したことでした。

希望者を募ったところ、約20人の生徒が集まりました。集まったのはほとんどが女子生徒で、男子生徒は一人だけでした。Aは、一人称をどうするかで悩んだこと、実は小学校の頃から性に違和感があったこと、「女の子らしく」とか「女子力」という言葉に不快感を覚えるということを話していました。

Aの話が終わると、生徒たちが次々と質問をしていて、改めて関心の高さがうかがえました。生徒の感想には、自分はLGBTQではないが、女らしくしなさいと言われることや一人称をどうするかで悩んでいること、Aが周囲に理解してもらえなかった悲しみへの共感、そして自分がこれからどう接していけばいいか考える機会になったこと、そのことへの当惑等が書かれていました。

多様性を認め合い 尊重する社会づくり

今、LGBTQに関してさまざまな配慮がなされ、学校でも前述のようにジェンダーレス制服の導入があったり、模擬

試験でも性別を書かなくてもすむようになったりしています。また、校則を変えようとする動きも生まれています。

そのような中で私は、「LGBTQの方に対してすべき配慮」を考えるのも大切ですが、まずは「当事者の声を聴くこと」だと思っています。当事者たちがどのような配慮を望んでいるのか、丁寧に聞き取って理解した上で、必要な配慮や支援を考えるべきなのだとこのことをこのケースから学びました。

そこで必要になるのは「対話」だと思っています。

親子であっても価値観は違います。「あなた」と「私」は異なる人間であるという、わかりあえないことからスタートをするのです。違うから、わからないから教えてほしい。そのわかるうとする姿勢が、相手をエンパワメントできると考えます。

これからもこの姿勢を大切にしながら対話をして、学校教育相談活動を行っていきたいと思っています。